

## 令和4年度 第3回 織田廣喜美術館運営協議会 会議録

1. 会議の名称 令和4年度 第3回 織田廣喜美術館運営協議会

2. 開催日時 令和5年3月23日(木) 10:30～

3. 開催場所 織田廣喜美術館 市民アトリエ

4. 公開非公開の別 公開

5. 出席者 ※敬称略

(1) 出席委員

緒方 泉(会長)、坂本 留里子(副会長)、三木一司、丸山 桃子、  
宮脇 教子、坂田 続穂、栗野 麻里

(2) 欠席委員

なし

(3) 執行機関

生涯学習課長(館長) 末永 康洋  
課長補佐 上野 智裕  
美術館係主査 有江 俊哉

(4) 指定管理者

(株)図書館流通センター統括責任者 下田 富美子

6. 傍聴人数 0人

7. 議題及び審議の内容

### 【議題】

(1) 令和4年度事業経過について

(2) 令和5年度事業計画について

(3) その他

### 【提出資料】

(1) 令和4年度事業経過(令和4年4月～令和5年1月)

(2) 令和4年度展示会別実績

(3) 令和4年度事業総括表

(4) 令和5年度事業計画

## 【議題及び審議の内容】

### (1) 令和4年度事業経過について

指定管理者による説明。それに対する質疑応答。

《主な質問・意見等》

委員：「熊本くにもみ展」会期中の入館者は、資料1では、実質利用者数が676人だが、資料2は、総計が768であるがこの差異は何か？

指定管理者：貸館の部分は、主催者が会場入口で受付して、入場者数をカウントしたものが入館の実績になるので、純粋に「熊本くにもみ展」に入場した数字である。

会長：報告するにあたって、違う数値を分けているのはどういう意味があるのか。

指定管理者：美術館受付では常設展に入場者が、貸館会場に入場したかは把握できず、貸館の会場入場者と、常設展入場者の延べ人数となっており、常設展入場者が、貸館会場に入場しているかもしれない。

会長：貸館入場者の676人っていうのは、一般や高校生、団体の方々とも分けているものなのか。

指定管理者：そうである。

会長：では33人の一般っていうのは、その際に常設展入場者ということか？

指定管理者：そうである。貸館の際に常設展入場者は受付でカウントしている。

会長：ならば「熊本くにもみ展」を観に来ているわけじゃないかもしれないのか。

指定管理者：そうかもしれないし、両会場の観覧目的かもしれない。

会長：貸館期間中に常設展だけを観に来ているっていう人もいるかもしれないということだが、それはカウントできないのか？

指定管理者：それはカウントしていない。

会長：市としてはこのカウント方法はどうか考えるのか？

事務局：従来からそういう方法でカウントしてきている。貸館の入場者数は主催者にカウントしてもらっているが、美術館の受付では常設展示の入館者数しか把握できないので、双方を合算した延べ人数で集計方式を行ってきた。このカウント方式長年踏襲し集計、統計様式の表を作成してきた。

事務局：今年度は初年度ということがあり4年度の事業報告は行政の方で作った経緯があり、この統括表の内容を指定管理者によりまとめていただいた。報告書の内容が確かに見にくい部分もあるが、次年度はこういう形ではなく、指定管理者がもっとわかりやすく、一目瞭然、全て全部突合するような内容になると思う。

会長：たくさん利用されているからすごいと思う。だからこそ、今後資料としてすごく重要になる。これだけ幅広い方々が、市民アトリエ、展示室を利用、見学に利用されていることをもっとアピールしなくてはいけない。「県展」などへ学生が出品する動機付けとなるし、これだけ多くの人たちが利用しているは非常に重要であるので、見せる資料というの、今後少し考えられると良いところを、委員が発言してくださったと思う。

委員：資料5の事業総括表内の自己評価にA評価がついているっていうのはすごいことだと思った。そして、委員としてはこのA評価の根拠をこの資料から探すわけであるので、このA評価の根拠がこれだいうところが、明確にアピールできればいいが、そこが見えにくかったので、ちょっともったいないなと思った。

会長：委員が述べられたように、説明と根拠と繋がるっていうか、実質の数だけじゃなく、これだけ市民に愛されている美術館だということについては、きちんと説

明ができるような説明と根拠の繋がり方を考慮することが必要だと思う。

**委員：**「県展」の彫刻部門に職場の人が出品しているし、学生が入選することもある。毎年の入選ではないが入選された時には、福岡、北九州会場まで観に行っている。筑豊には彫刻部門の巡回がこちらに来ないので観に来ることができず残念である。筑豊巡回展に彫刻部門が来てくれれば、若年層の開拓にもなる。以前「県展筑豊展」を観覧した際には高校の美術部も入選して展示されていて、なかなかよかったし、そういう若年層の方たちが観に来るのかなと考えたりした。資料4の入館者数比較だが、開館日数が順調に増えているが、コロナ禍以前の2019年より前はどれぐらいの状況か比較できたら良い。2020年、2021年と特殊な事情だったので、これだけ状況が悪かったという点は可視化できているが、今年度が2019年度と比べてどれぐらい戻ったかを知りたい。

**事務局：**利用者と入館者数を合わせ、2019年は12,286人、2018年は16,196人、2017年は13,024人である。貸館の集客の増減も大きく影響する。「MOA美術館展」は作品も減っており、ピーク時と比べたら今年は入館数が半分になっている。市文化協会総合文化祭は会期が1週間から3週間であったが、現在は日数が減り入館者数も減少した。一方で中学生の作品展は年々入館者が増えている。また文化祭が碓井地区は開催できなくなったなどで多少変動もある。個人の作家の個展での利用が徐々に復活してくれば、入館者も戻ってくると思っている。本年度は2月分まで数値を入れたら10,000人を超えており、現在「春のコレクション展をコレクション展」を開催しており3月末に、12,000人近くまで盛り上がることを予測している。

**会長：**福岡市内の博物館、美術館では入館者は戻らないまま今まできている。そういう中で愛されるこの織田廣喜美術館という位置付けは、本当に重要だと思う。先ほど委員が発言されたように、資料でその堅調ぶりをアピールしていくということはすごく重要である。そういう中では、数字は前の方に出していくような表も用意をしておいて、今後の上層部への報告等の作り方について工夫があるといいというご意見がこの場に出てきたと思う。予算を獲得するということであるという作戦で予算がついてくることになったりするので、集めた数字をどう見せていくのかというところも重要と思っている。

**委員：**「ノントン展」を見学したが楽しく、いい展覧会であった。

**会長：**やはり原画を観られるのはすごい。それと我々が手元に見るのは絵本になったものの結果だが、そのプロセスを知ることができる。

**委員：**事前に資料を送っていただいていたので、読み込むことができてよかった。数字を見るとすごく頑張って運営されており、来館された方も多いことが伝わったが、市民レベルで言えば、何があっているかわからないところは、まだもう少しあると感じる。資料で見たらすごくわかりやすかったが。

**会長：**市民目線からすると、何があっているか情報を得るには、どういう形がいいのだろうか。いろんな世代がおられるから、やっぱりその世代全部にというのは、なかなか難しいかもしれない。委員の世代からするとどんな形だったら一番見やすくキャッチしやすいか？

**委員：**SNSが一番伝わりやすいと思うが、新聞もかなり効果があると思う。ただ開催されていた事業が後からわかったとかいうのがあり、とても残念だった点と、関わらないと事業のよさがわからないので、できるだけいろんな方に来ていただけるよう多くの市民を巻き込んだ取り組みをしてほしい。学校等の利用がすごく増えていたのは嬉しい。

**会長：**先生方も含めて学校に段々浸透してきているんだということはこの資料を見るだけでもよくわかる。

**委員：**若者というワードが重要で、若者をもっと集めたいならSNS等の活用をもう少し頑張ったほうがいいと思う。学校の行事等が増えてきているが、うちの子もクラスで美術館に見学に来てすごく楽しかったと言っていたし、クラスの子どもの絵が入選し絵が飾られて、観に行ったという話を何人かの保護者から聞いた。

**会長：**美術館にボランティアはあるが、それとは別に「面白がってSNSをやろう部隊」みたいなボランティアを募集して、広報発信する若い人たちを募ることも検討してもいいかもしれない。もちろんその発信の内容についてはきちんと精査しなくてはいけないが、面白がるっていうワードが出てくると、いろんな発想が生まれて発信される。また、発信方法については彼らの方が上手い。そういう若い人たちのアイデアを活かせるボランティアを募集し、毎日来る必要はなく、適宜必要な時に来てもらい行動してもらおうといい。例えば美術部などに声かけて面白がってやってくれるような形が出てくるといいと思う。そうすると若い人たちが今度は「県展」に出してみようかに繋がり、連鎖反応が起きて、ここが何かそういう若い人たちのアートの発信の場のような状況ができてくるといい。

**委員：**MOA美術展は、以前はここで表彰もされていた。そうすると参加する児童も保護者にも喜ばれていたと思う。私ごとだが子どもが展示されていることを失念していたので、展示されているのか知らず、知り合いのお母さんから展示されているということを聞いたが会期が終了していて観ることができなかった。今までここで表彰とかあったので、表彰状をここに受け取りに来ていたし、そうすると、学校の方からも通知が来ているだろうが現在はどうなっているのか？

**事務局：**以前は表彰式が実施されていたが、コロナ禍にあって、表彰式のなどの縮小、またMOA美術展実行委員会の組織自体が、ご高齢で関わる方が減ってきたと言う事情は聞いている。よってこの展覧会の存続自体も他の地区では、難しくなっているという状況を実行委員会の方から聞いている。

**会長：**活動を維持していくということで考えると年齢がどんどん上がってきており、そこが悩みである。だから若い人たちにどう受け継いでいくのかという体制の継承問題がすごく重要になる。だからこそ、アートが大好きな若い人たちを、次世代をどう作っていくのかと合わせながら考えて欲しい。先ほど出た意見の「県展」の出展内容ということについてだが、筑豊巡回展の場合は3期に分かれて開催されているが、これはどういう内容なのか。

**事務局：**現在筑豊巡回展は、5部門の巡回を受け入れている。第1期が洋画、第2期が日本画、写真、デザイン、第3期が書である。先ほど委員から発言がありました彫刻だが、以前から筑豊地区では彫刻部門の入賞者がいないということがあり、現在彫刻部門の展示は本展の福岡県立美術館と北九州会場のみである。彫刻作品は重量物であり、取り扱いがすごく難しいと巡回展会議でも課題にはなっている。今後の若年層への広がりという部分では県展は出品規定の見直しが図られ、今年度はデザイン部門が家庭のプリンターでの出力が可能なA3サイズの出品が可能ということになり、本年度はA3サイズの作品が大きなB2パネルサイズが多い中での最高賞である県知事賞を受賞している。写真もそうだが、A3の出品が可能になるということで、出品のハードルが下がった。洋画部門も規格の見直しがあり、従来は80号までが100号まで出品可能となった。公募展では100号までというのが主流であり、この規格の変更で出品者は手持ちのキャンパスや額が使えることか

ら出品しやすくなり、出品数の増加に寄与していると聞く。

**委員：**織田廣喜美術館の入館者数が増えているのはコロナを逆手に取ったものだったと思う。公共の交通機関等は利用せずに車で来館でき、そしてある程度間隔が確保できる空間があるというところは、都市部の美術館等の来館者が戻らない状況下で、こちらは入館者が戻ってきたっていうところをもっとアピールできると思う。また、若手の話だが、近畿大学産業理工学部との連携事業を実施されているが、近隣の志耕館高校や総合高校等も美術部や書道部が盛んに活動されていると聞くので、その生徒たちがここで活動するというのもいい。学校内ではなく、ここで活動するメリットがなければ高校側も選択しにくいだろうが、志耕館高校であれば、野外での太鼓の演奏だったりとか、総合高校であれば飼育されている動物があつたりするので、そうすると高校生が来るとなるとそれに引き寄せられて中学生も、高校生の活動に接することができる。中学生の作品展をするだけではその出展をした者とか、その近い人しか来館しないが、高校活用すると、それ以外の中学生等が集まるといふ広がりがあると思う。ただ、高校側には交通費や、搬入経費と費用がかかるので、ここでするメリットっていうのが大切だと思う。

**会長：**福岡市科学館は、スーパーサイエンスハイスクール（※1）の高等学校等を一堂に集めた事業を持っている。高校側のメリットは、入学説明会をそこで開催できるということ。高校も大学も現在経営に必死であるので、そういう機会があるならば、自分たちの今特色あるものを持ち寄って、それをお披露目する。各学校はブースを設けて、高校生がそこに来ている中学生と、自分の学校の特色を語ることもあつたりする。だから美術館は美術だけではなくて、それぞれが社会資源でもあるということ認識し、いろいろメリットがあることを進めていくことが重要である。そうすることで新たな客層の獲得につながっていく。織田廣喜美術館に来てもらえば、この素晴らしさを初めて知ることになる。300号の大きな作品を見たらびっくりする。自分と同じ背格好の人物を300号は描けるわけだから、織田廣喜はどうしてこんな300号という大ききの絵が描けたのだろうって想像する。そうすると梯子や踏み台、高い足場組んで描いていったのかとか想像する。そうして300号の絵に対してこれだけのエネルギーを画家の人たちは情熱向けて描いているんだ。自分も絵が好きだけどこんな大きな絵を描いてみたいなど、新しいチャレンジが生まれてきたりするかもしれない。今の委員のお話はすごく重要だと思う。

## （2）令和5年度事業計画について

事務局による説明。それに対する質疑応答。

《主な質問・意見等》

**委員：**織田廣喜美術館だけではなく、美術館全体に対して思っていたことだが、赤ちゃん連れで美術館に来た時に、ゆっくりと観覧できず、つらい思いをすることがよくあつた。お母さん同士の会話で同様な意見があり、月に1回でもいいので託児所を開いて、お母さんがゆっくり見られるような日があつたらいいのになつていうのは、前々から思っている。なかなかそういうのをやってくれる美術館がないので、やってもらいたい。

**会長：**海外に行くと、小さい子たちが当たり前博物館、美術館に来ている。それは安心安全に、子どもたちを連れていけるっていう環境が整えられているからだ。まず入口に入ったところでは、ベビーカー専用の駐輪場が整備されている。そのあとには、おむつ等大きな荷物を持つてくるが通常のロッカーで入らないから預かり

所があり、そのあと、子どもと家族と一緒に観てもらおう仕組みがある。子どもはなかなかわかりにくいかもしれないが、親子で語り合うっていう時間を大切にする。もちろん、子どもだから、大きな声を出したりして、迷惑をかけてしまうこともあるかもしれないが、それはお互い様だというような環境が博物館を身近にできている。日本の場合だとうるさいとすぐ言われ、なかなか行きにくく、もう行かなくていいかなと敬遠されてしまう。せつかく子どもの情操教育が必要な時期に、子どもたちはその作品と出会うタイミングを失う。では大学生になって行くかっというと、行かない。小さな時からの美術館での触れ合いが重要で、託児については毎月の実施は無理かもしれないが、大きな展覧会の会期中に1日だけでも託児を設ける日を設定するという方法あるかもしれない。福岡市は地域福祉課に保健師が配属されており、各区に入って幼児をお持ちの方々に栄養指導等を実施しているが、嘉麻市でもそんな時に、託児ありといったチラシがあったりするといふ。そうすることで、小さな子どもを連れてなかなか行けなかったけども、そういう取り組みがあるなら展覧会会期中に1回だとしても、行きたいなという動機になる。個人の選択の自由で、その絵が、美術が好きと言う人もいるかもしれないし、スポーツが好きだって人がいるかもしれないが、美術、文化芸術が好きだっていう人たちのために開放する。織田廣喜美術館の一つの目玉にしていき、好評であれば市の方も考えて、それを3回、4回してもいいんじゃないってなってくる。来年度そういう取り組みを1日だけ提案しても良いように思った。

**会長：**来年度から義務教育学校となって、博物館や美術館、特にこの美術館の使い方等についても、これまで通りたくさん使っていただきたいが、何かご要望等があれば、この場で発言してほしい。今年度どうだったか？

**委員：**中部連の美術文化作品展で展示をさせてもらった活動しかできない。

**会長：**中学校の美術文化作品展で繋がっていることは重要である。資料を見ると見学等で碓井小学校が館内見学で来てくれている。美術館に近い碓井の小中学校だからこそ活用をしているのはよくわかる。次年度も、初めは難しいかもしれないが、年間行事なんかに取り入れてもらうことが進められてくるといいと思う。

**委員：**継続的に取り組んでいけたらとは思っている。また子どもたちが貸与されているタブレット等を使って、美術作品や展示などに触れたり、子どもたち自身が美術館の中で、映えるスポットで撮影したりして美術館を利用することで広がっていくかとも思う。なので、子どもたちが本当は気軽に、そして子どもたちが気になるようなところを取り入れていかないと、なかなか授業で来ただけではそのあとに継続していかないと思う。

**会長：**2月にイギリスの博物館関係者と一緒に勉強会したが、ユネスコの世界子供白書が出て、10人に6人の子どもたちがメンタル不全を抱えているとのことである。日本もそういう数値が出てきている。ロンドン市内の小中学校の子どもたちを対象に、メンタル不全を一つ大きなテーマに活動する美術館もある。コレクションを活用しながら、ここで言うと織田廣喜の作品を見ながら、そこにインスパイア、触発される中で出てくる、タッチであるとか色だとか、そういうものをそれぞれ自分らしく表現させる。綺麗に描くとかではなく、そのまま出てきたものをそのまま描いてみようよ、ぶつけてみようよと声掛けしながら、子どもたちのメンタルヘルスを支援していく。子どもたちは、一つのアートっていうものを介しながら、自分の中に生まれているものを押し出してみようという時間とする。現在学習指導要領などでは美術や図工の時間が少なくなっているけれども少なくなっているからこ

そ、博物館・美術館を上手く活用することによって、表現の場としての博物館・美術館だということが先生方の中で、共有できてくると、利用の仕方も変わってくる。これまでだと図工や美術の時間に教科で使おうということだったことが、子どもたちの気分転換に使う、そんな利用が出てきてもいいのかなっていうなことをイギリスの方々の話を聞いていて思った。

**会長：**美術協会等の活動では来年度も、それぞれ何か新しい活動みたいなのはもう出てきているのか？

**委員：**10月にクラフト展を美術館で開催することは分かっている。年が明けて開催していた書初めの事業は、例年使用している会場が耐震工事の関係で使用できないので、展示会場は美術館を借りて実施しなければいけないと考えている。

**会長：**建物の改修は、ちょうどピークになってくるような時期でもある。だからこそ、その活動を止めないとためにも、開催できる場所を探しながら、大きくはできないかもしれないけど小さくても続けていかないと、途切れると復活するのが大変なので、そこは相談をされてほしい。

**委員：**やめるのは簡単だが、1からまた立ち上げると大変だ。

**委員：**来年度の事業はいろんな面で計画がされているのでいいと思う。昆虫の写真展はまだ詳細とかは決まってないのか？

**指定管理者：**日程は決まっている。内容は写真パネル50点を展示室に、特大のロールを美術館への階段上がったところの上に3本程展示する。この写真を撮影されている栗林さんによる大人向けの講演会と子ども向けのワークショップも予定している。また栗林さん自作の離れたところから小さいものを大きくとるカメラで撮影された写真は、昆虫を自分たちよりも大きく感じてしまう迫力があり、それらを常時流していく。ただ「ノントン展」と違い、昆虫が苦手という人もいるので、昆虫が大きすぎると避けられることもある。妹は嫌だけどお兄ちゃんも観に来たい話になることも想定されるので、両方ともに展覧会を楽しめるかを考えている。

**委員：**先ほど委員が発言された託児のことだけではなく、様々な子育てのことで、相談業務みたいなものと抱き合わせると、普段はなかなか相談に来る機会がない方にも、そして託児もあれば気分転換に美術館へ行ってみようかなというのもあり得ると思う。生涯学習課と子ども育成課等の部局で連携すれば実現できる可能性もあると思った。また昆虫展は夏休みの宿題の自由研究等に活用できると思う。

**指定管理者：**図書館と抱き合わせで計画したい。

**委員：**こういう書籍があると紹介をしてみたり、調べ学習をしてもらうとかタブレットの活用などで学習の幅が広がると思う。児童、生徒へ貸与されているタブレットで写真を撮影していいのであれば例えば天気の良い日に美術館周辺の写真撮って映え写真コンクールなんていうのも面白いと思う。

**指定管理者：**プロのカメラマンにご提案のようなワークショップをしていただいてもいいかなと思う。

**委員：**学校で使っているタブレットでいろんな風景したりするとよい。自分たちの住んでいる地域の写真など。

**指定管理者：**展覧会終了後に子どもたちの撮影した写真を募集して、写真の展示会へと続いていけたらとよいと思っている。

**委員：**ミュージアムショップに美術館へ行くと立ち寄り買ってしまうし、楽しみにしている。展覧会の期間が終了するとショップも撤収するのか？そのあと1ヶ月か2ヶ月かそのショップだけ継続はできないか？

**指定管理者：**展覧会にパッケージとなっている契約なので難しい。しかし海外のグッズを販売したりする魅力的なショップもあるので、方法を調査してみたい。

**委員：**どれぐらい購入する方がいらっしゃるかもわからないが、展覧会が終わっても、ちょっと余韻を楽しみながらお買い物っていうのもあるのかなと思った。

**会長：**令和5年度がはじまるが、今回事業の計画を見せていただく中で楽しみな展覧会がたくさんあるし、市民の方々に対してのサービスをより充実させようということも見えてきているのでぜひ継続していただきたい。もう一つ大切なのは図書館との連携を常に意識してくださっている点である。利用者もこれまで図書館だけ、美術館だけだったのがそれぞれの施設に行くことで、相互乗り入れが始まりさらに相乗効果が上がってくる可能性があるので、ぜひこの点は進めてもらいたい。

### (3) その他

**事務局：**現在生涯学習課の組織で美術館係、図書館係とあるが、4月1日から二つの係が統合され図書・美術館係と組織が変更される。市立図書館、織田廣喜美術館の業務に携わるようになる。

あともう1点が、3月4日から4月16日まで100号から300号までの大作を一同に公開する春のコレクション展を開催している

### 閉会

この会議録は、緒方会長に確認していただきました。

### ※1

文部科学省では、将来国際的に活躍しうる科学技術人材の育成を図るため、先進的な理数系教育を実施する高等学校等を「スーパーサイエンスハイスクール」として指定し、理科・数学等に重点を置いたカリキュラムの開発・実践や課題研究の推進、観察・実験等を通じた体験的・問題解決的な学習等を平成14年度より支援しています。【文部科学省HPより】